大谷秀樹『貝島家の炭坑経営一明治・大正期 会計 帳簿の分析一』:著書と著者について

山田,秀 ^{九州産業大学}

https://doi.org/10.15017/13892

出版情報:エネルギー史研究: 石炭を中心として. 24, pp.99-105, 2009-03-19. 九州大学附属図書館付

設記録資料館産業経済資料部門

バージョン: 権利関係:

書評

大谷秀樹『貝島家の炭坑経営―明治・大正期 会計帳簿の分析―』 ―著書と著者について

山田

れた。この書は著者の遺著となってしまった。心に配布されたものである。著者はこの刊行を終えた二月後に亡くなら本書は、昨年十月に私家版として刊行され、著者と親しい研究者を中

ただくことにした。 全前学窓を同じくし、一時仕事の机も並べた者として、著書と著者の紹生前学窓を同じくし、一時仕事の机も並べた者として、著書と著者の紹ていない者が的確な評を述べることもできないのでためらっていたが、

著書について

領ける。本書はA4版の大きな版である。学術書としては珍しい形である。著本書はA4版の大きな版である。学術書としては珍しい形である。著本書はA4版の大きな版である。学術書としては珍しい形である。著

さて、本書は四つの章からなる。各章はそれぞれ既に論文として発表

されている。発表順に並べると次の通りである。

1

史研究』第十八号 西日本文化協会 二〇〇〇年三月)「創立期貝島鉱業合名会社の資金調達と石炭販売」(『福岡県地域

《本書第二章》

- 二〇〇三年三月) 《本書第三章》 ネルギー史研究』第十八号 九州大学石炭研究資料センター2 「貝島鉱業合名会社『総勘定帳』に見る財務構造の変化」(『エ
- 1○○六年三月) 《本書第一章》4 「創業期具島炭坑経営の特色―企業内部請負制と補完炭坑についる。

第二章から書き始め、第三章、第四章と進めて、最後に第一章を書き、

明確にして本書をまとめている。大正期までを完成させている。そして全体の論旨を統一し、問題意識を貝島炭礦の創業期から、三井の一手販売権を取り戻して自家販売に至る

成長と限界が何に由来するものなのか」という点にあった。財閥に支配されねばならなかったのか、それは裏返せば、「地場資本の肩を並べるまでに成長したにもかかわらず、なぜ長期間にわたって三井筑豊石炭鉱業において地場資本として三井・三菱などの財閥系の炭坑と著者の問題意識とは、「はしがき」で述べているように、貝島炭礦は、

次史料や「七十年史稿」資料などを駆使して経営分析を行っている。著者は、このような問題意識のもとで、貝島炭礦の会計帳簿などの一

ることとなったとしている。

の本格的な経営史研究である。 全体を時間的流れに沿って、明治前中期の創業期から大正期の具島商全体を時間的流れに沿って、明治前中期の創業期から大正期の具島商全体を時間的流れに沿って、明治前中期の創業期から大正期の具島商

たことが述べられている。

たことが述べられている。

の目島のその後の姿を規定していっあり方、そしてそれが経営体としての貝島のその後の姿を規定していっを獲得して、本格的に炭坑経営に乗り出した創業期の貝島の業務組織のを獲り歩いて請負掘りを長く続けていた貝島太助が、香月炭坑の請負でを渡り歩いて請負掘りを長く続けていた貝島太助が、香月炭坑の請負でをで、「第一章」創業期貝島事業経営の特質」では、いくつかの炭坑

すなわち、香月炭坑時代の貝島一族(姻戚までを含めた)による請負

たため委託せざるを得ず、それが三井物産に販売権を委ねることへ繋が時による直轄制とも事業部ごとの独立採算制とも異なる、「企業内部請部による直轄制とも事業部ごとの独立採算制とも異なる、「企業内部請息の経営組織は、主要な業務が一族によって請負でなされるという、本島の経営組織は、主要な業務が一族によって請負でなされるという、本業務のあり方は、大ノ浦・菅牟田炭坑においても踏襲され、創業期の貝業務のあり方は、大ノ浦・菅牟田炭坑においても踏襲され、創業期の貝

一手販売する契約が結ばれることになったと述べている。
の借区名義が三井物産の手に渡るとともに、両坑の採掘炭を三井物産が列家、三井物産から資金の肩代わりをしてもらい、大ノ浦・菅牟田両坑ず、貝島は多額の負債を抱えることになり、その結果井上馨を通じて毛ず、三島は多額の負債を抱えることになり、その結果井上馨を通じて毛明治二十四年の選定鉱区制の実施によって鉱区の拡大を図らざるを得

大ノ浦・菅牟田両坑の鉱業権・販売権を握られる一方、貝島は明治大ノ浦・菅牟田両坑の鉱業権・販売権を握られる一方、貝島は明治

扱っている。日清戦争にともなう好況下で毛利家に渡っていた鉱業権を会社を設立して以降、明治四十二年に株式会社化するまでの時代を取りおよび三井物産からの借財を整理して鉱業権を取り戻し、貝島鉱業合名「第二章 貝島鉱業合名会社の経営構造」では、明治二十九年毛利家

問就任など三井に近い人物が入ってきた過程が述べられている。 世組織を大きく変えている。それまで姻戚を含めた一族会社であったが、 社組織を大きく変えている。それまで姻戚を含めた一族会社であったが、 経営者から姻戚をはずして貝島太助と兄弟、およびその家族に限定する ことになる。その経緯を「定款」や「家憲草接」を用いて詳細に述べて いる。また、その背景には井上馨が大きく関わっていたことを指摘して いる。そして、経営陣へ中根寿や金子辰三郎の入社、また永江純一の顧 即り戻すとともに、長期融資・固定した短期融資先が毛利家・三井物産 取り戻すとともに、長期融資・固定した短期融資先が毛利家・三井物産

る

次に、明治三○年代前半までは貝島炭の販売において毛利家と百十銀であるをえなかったとしている。

掘費と販売権の相関をもとに解明している。 くとともに三井物産による一手販売が進んでいくことを、各坑業所の採井物産・三井銀行の資金融資にともなって、次第に本社直轄となっていー創業期には補完炭坑であった―について言及し、それらの諸炭坑が三さらに、貝島姓以外の親族などが採掘にあたっていた傘下の関連炭坑

問題を資本・負債の変化から見るとともに、資金運用の実態をとりあげ析している。まず、財務の安定性、流動性、収益性を概観し、資金調達財務構造の変化を、「総勘定元帳」から作成した財務諸表で数量的に分財の

分配されるとともに、株式会社への転換に繋がっていく様子を描いてい積立金の増加がみられ、資金的に余裕がでてきており、それらが社員へている。さらに、日露戦後には借入金の減少―三井への完済―とともに

開を考察している。

開を考察している。

「大正九年」の貝島一族会の事業展四十二年の貝島鉱業株式会社の設立から貝島商業株式会社(大正八年)四十二年の貝島鉱業株式会社の設立から貝島商業株式会社(大正八年)

明治四十一年に「貝島家家憲」が制定されて貝島一族が規定され、翌四十二年に「貝島一族会」は貝島鉱業合名会社を改組して株式会社とす区所有においても「一族会」がさまざまな事業を展開することになり、鉱区所有においても「一族会」によって鉱業株式会社の所有であったことを、族会」が所有したりと、「一族会」が目島の企業体の核であったことを、底会」が所有したりと、「一族会」が制定されて貝島一族が規定され、翌とを指摘している。

より大正六年から炭価が大きく上昇し、そのため貝島は次第に自家販売売制度で取り扱ってきた麻生炭・三井鉱山炭とともに混炭して販売するであったため、大正四年に貝島に大きな影響力を持っていた井上馨が、であったため、大正四年に貝島に大きな影響力を持っていた井上馨が、であったため、大正四年に貝島に大きな影響力を持っていた井上馨が、の間の経緯を詳しく述べている。明治四十四年に三井物産は、一手販きのであった大正八年に貝島商業株式会社と貝島合名会社が設立されるが、そして、大正八年に貝島商業株式会社と貝島合名会社が設立されるが、

い。株会社として貝島合名会社を設立した。ここまでを本書では取り扱って株会社として貝島合名会社を設立した。ここまでを本書では取り扱って係を絶ってすべて自家販売するようになった。同時に「一族会」は、持を行うようになり、大正八年に貝島商業株式会社を設立し、三井との関

である。 である。 である。 である。 である。 である。

とかし、本書は、貝島商業株式会社と貝島合名会社の設立時点で終わっている。第四章の"はじめに"で、「商業株式会社の『総勘定元帳』をなす市場構造の変化への考察が必要であることは言うまでもない。これなす市場構造の変化への考察が必要であることは言うまでもない。これなす市場構造の変化への考察が必要であることは言うまでもない。これなを言なかった」と記しており、もはや研究を進めることのできない著るを得なかった」と記しており、もはや研究を進めることのできない著るを得なかった」と記しており、もはや研究を進めることのできない著るを得なかった」と記しており、もはや研究を進めることのできない著るを得なかった」と記しており、もはや研究を進めることのできない著名の無念さが伝わってくる。

また、本書は多くの一次史料を全文掲載しており、史料的価値の高い

の石炭産業とは何だったのか、それを明らかにしたいという思いではなの石炭産業とは何だったのか、それを明らかにしたいという思いではならい。本書の通底に流れるのは、なぜ貝島炭礦は潰れなければならなかったのか、子供時代の活気のあった町が、次第に衰退していく様をなかったのか、子供時代の活気のあった町が、次第に衰退していく様をものとなっている。さらに然勘定元帳やその他の会計帳簿を整理して、ものとなっている。さらに総勘定元帳やその他の会計帳簿を整理して、ものとなっている。さらに総勘定元帳やその他の会計帳簿を整理して、ものとなっている。

著者について

かったろうか。

著者である大谷秀樹君は、一昨年十月に本書を刊行した直後、同月十七日に九州産業大学で開かれた経営史学会西日本部会に本書を携えて来、出席者に自ら配って回った。それが、筆者が著者に会った最後であったいて話をした。その際、もうこの報告が最後である、と語っていたが、声の調子もとくに変わったこともなく、変なことを言うなと思ったものの、深く問い質さなかった。あとで思うと、彼は別れを告げようとしたのであったろう。こちらから何も聞かなかったのが、いまも心残りである。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。ただ、余命機ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。ただ、余命幾ばくもないということを聞いても、私はうろたえるばる。

れない。 かりであったろう。 何も言わなかったのは彼の思いやりであったかも知

にご家族に見守られて逝かれたということを後にお聞きした それから、 およそ一月あまりのちの十二月二十五日、 クリスマスの日

な病を得ていたことは、ご家族以外ほとんど誰も知らされてなかった。 後には骨にまで転移していたということもあとで知った。彼がこのよう 私が訃報を聞いたのは一月に入ってであった。彼が肝臓癌であり、 最

何だったのか。 資本主義のもとで翻弄され、 の出身であり、 礦を研究するという明確な目的を持っていた。彼は宮田町 それからの付き合いである。 五十一年に博士課程前期に入学してきたとき、私は博士課程後期にいた。 筆者が彼と出会ったのは、 さまざまな思いを抱えていたようである。 祖父の代から貝島炭礦で働いていると言っていた。日本 衰退していった石炭産業、そして炭鉱とは 彼は入学したとき既に筑豊石炭業―貝島炭 福岡大学の大学院であった。 (現宮若市 彼が昭 和

昭和三十年代より、 政府のエネルギー政策の転換によって次第に石

昭和

2004年 イギリス旅行 での著 8月 三十五年には三井三池炭鉱に 炭産業は衰退していき、 彼が小学校のとき、

ら合理化と人員整理が行われ くなっていったようである。 対決が起こった。これ以前か おいて総資本対総労働の全面 ており、 炭鉱はしだいに淋し 同級生が

> まれ育ち、 究―貝島炭礦の研究へと駆り立てていったのであろうか のを、たまたま読んだと、実兄秀俊氏は語っておられた。 人また一人と転校していくことの悲しさ、辛さを作文に書いてい 急激に変わっていく様を見つめてきたことが、 貝島炭礦で生 石炭産業史研 た

りの午後、 れられ、菅牟田炭鉱の竪坑の跡や露天掘り(まだ底をトラックが走って も続かなくなっていた。閉山後であったと思うが、その年の秋の雨上が 貝島を残して閉山しており、 いた)、人影まばらな炭鉱住宅などを見て回った。淋しい光景であった。 彼が大学院に入学した年の八月、貝島炭礦は閉山した。 恩師である藤本隆士先生そして大学院の院生とともに彼に連 貝島も露天掘りだけを稼働していた。それ 筑豊のヤマは

炭礦清算会社にも頻繁に出入りし、 らいろいろ史料情報などを得ていたようであった。また、 誌編纂室には現在山口県立文書館副館長の吉住久年氏がおられ、 巻の編纂が行われていた宮田町誌編纂室に足繁く通っていた。 いたようである。 修士論文の作成に取りかかった彼は、 史料の所在の明確化や確保に努めて ちょうどその頃 『宮田町誌』 閉山後の貝島 当時、 同氏 上 町

引き受けることにした と思うが、彼から私に下巻の産業編を一緒にしないかとの声がかかり 士課程前期在学中から下巻の編纂嘱託として勤め始めた。 『宮田町誌』上巻は昭和五十三年に刊行されるが、 彼はその前年の博 翌年であった

教室にあった。今は二階建ての集合住宅となっているが、 念館は廃校になった大ノ浦小学校を利用したもので、 編纂室は、 開館したばかりの 「宮田町石炭記念館」 にあっ 編纂室はその隅の 石炭記念館 た。

えてもこの功績ははなはだ大きいものである。とにかくこの時期、彼はえてもこの功績ははなはだ大きいものである。とにかくこの時期、彼はなと、その先には深い真っ暗な闇の世界広がっているような気がした。の清算会社には何度も足を運び、同社の持っていた。とくに、貝島炭礦されていった。また、史料の採訪に動き回っていた。とくに、貝島炭礦されていった。また、史料の採訪に動き回っていた。とくに、貝島炭礦されていった。また、史料の採訪に動き回っていた。後は黙々と史料の採みると、その先には深い真っ暗な闇の世界広がっているような気がした。東側には木造の校舎が壊されないまま建っていた。夜に暗い校舎の窓を東側には木造の校舎が壊されないまま建っていた。夜に暗い校舎の窓を東側には木造の校舎が壊されないまま建っていた。夜に暗い校舎の窓を東側には木造の校舎が壊されないまま建っていた。

そんな中でも、彼の音頭で、編纂室のみんなで―といっても編纂室室をしたりした。

精力的に史料収集と目録作成に励んでいた。

た。彼は、社長さんたちから可愛がってもらっていたようだった。た。私もそこに泊めてもらい、その社長さんたちと時に飲む機会があっ

で、行き来は絶えなかった。私に娘が産まれたときには、お祝いといっで、行き来は絶えなかった。私に娘が産まれたときには、お祝いといっが少なくなってしまった。しかし、彼が勤務のため福岡に越して来たの基女子学院高等学校に勤めるようになった。そのため、次第に会う機会が少なくなった。彼も五十八年より海とがラガラを持って来てくれたりした。

るが、 より倒れたとのことであった。いつ頃聞いたのかはっきりしないが、 年三月刊行の『エネルギー史研究』十八号に掲載された。そして、平成 本書の第二章に相当するものであった。その後、第三章部分は平成十四 こともあり、 は、筑豊石炭産業史を研究する上で欠かすことが出来ない一冊となった。 行された。明治の草創期から戦前まで、貝島炭礦を中心に宮田町の炭坑 九五〇頁に及ぶ『宮田町誌』の炭坑編を書き上げ、それは平成二年に刊 分はB型肝炎である、と語っていたことがあった。いつの間にか肝 十七年三月刊行の『エネルギー史研究』二十号に第四章部分を載せて まとめるということを本人から聞き、ゲラを見せていただいた。それが ない。平成十一年であったと思うが、もう一度貝島について論文として の発展過程を地域社会との関わりの中でまとめたものであった。この本 その後は、もっぱら高校の仕事で忙しいようであった。私が転居した しかしこの間、彼は高校教師という多忙の中で原稿執筆を続 実兄からお聞きしたところ、その三月朔日に彼は肝臓癌の破裂に 時折研究会で会うぐらいとなり、ゆっくり話をした覚えが け É

となり癌にまで進行していたとのことである。

一章部分を掲載している。
型年、彼と電話で話したことがあったが、その電話で今年の三月に高いな年、彼と電話で話したことがあったが、学校の都合でというようなでを辞めたと話していた。理由を聞いたが、学校の都合でというような

本書のはしがきの日付は二〇〇七(平成十九)年一月となっている。 本書のはしがきの日付は二〇〇七(平成十九)年一月となっている。 行った。

歳であった。教系のホスピスに転院して、そこで亡くなったとのことである。五十七教系のホスピスに転院して、そこで亡くなったとのことである。五十七その後、十一月下旬にふたたび入院し、本人が希望していたキリスト

かメールでお申し込み下さい。のことです。ご希望の方にはお送りされるそうです。下記宛先に郵便のことです。ご希望の方にはお送りされるそうです。下記宛先に郵便大谷秀俊氏(著者の実兄)のお話しでは、本書の余部がまだあると

宛先 大谷秀

俊

eメール rkbmy794@ybb.ne.jp福岡県福津市有弥の里一丁目一三 - 三

-105-